

地域資源をいかした持続可能なコミュニティ構築の ための都市・農村間連携 —中国貴州省の少数民族地域に おける 2017 年・2018 年調査から—

藤田 香^{*1}・大塚健司^{*2}・山田七絵^{*2}・松永光平^{*3}

Urban-Rural Cooperation for Sustainable Community Building
Based on Local Resources

: Field Researches on Ethnic Minority Groups in Guizhou Province,
China (2017-2018)

Kaori FUJITA, Kenji OTSUKA, Nanae YAMADA, Kohei MATSUNAGA

Abstract

In this study, we focused on traditional industries that used local resources in the ethnic minority region of Guizhou Province, in order to explore the possibility of urban-rural cooperation model in China. There are two main approaches. First, as an example of rural development with external support, the current situation and issues of the joint venture by the World Bank's poverty project were taken up, and the project site was visited and interviewed with relevant parties. Secondly, through the joint project of Guizhou Normal University and Citigroup Foundation, and NGOs, the production area of using the traditional local industries such as paper making, traditional musical instruments, silverwork, and batik. We visited and interviewed in this research areas. This study is a compilation of primary sources obtained from field surveys conducted in 2017 and 2018 on various examples of Guizhou minority ethnic groups area, mainly through the practice of people aiming to solve local problems.

Keywords : ① Urban-Rural Cooperation ② Sustainable Community ③ Guizhou Province in China
④ Ethnic Minority Groups ⑤ Danzhai Batik

1. はじめに

近年、社会的課題をビジネスで解決するソーシャルビジネス（社会的企業）が注目されている。とりわけ都市化の進展のなかで自然と共生してきた農山村地域の持続可能性が危ぶまれており、そうした地域が経済的に自立しながらいかに持続可能なコミュニティを創出できるか、その際に都市・農村間連携を可能とする社

会的企業などの役割はいかにあるべきか。このような問題意識のもと本稿では、中国における地域資源をいかした都市・農村間連携モデルの可能性を探るべく、西南内陸部に位置する貴州省の少数民族地域における伝統産業に着目した。調査対象へのアプローチとしては、大きく分けて2つの方法を取った。第1に外部支援による農村開発の事例として、世

受付：令和1年11月6日 受理：令和2年1月14日

^{*1} 近畿大学, ^{*2} 日本貿易振興機構アジア経済研究所, ^{*3} 立命館大学

界銀行の貧困プロジェクトによる合作社の現状と課題を取り上げ、プロジェクトサイトを訪問し、関係者に聞き取り調査を実施した。第2に貴州師範大学と花旗集団基金会（以下、シティグループ財団）のプロジェクトおよびNGOを通して、現地の代表的な伝統産業である紙漉き、伝統楽器（中国語で「芦笙」、以下同様に表記）、銀細工の装飾品（銀飾）、インディゴ（藍）を使っろうけつ染め¹⁾産地の視察および関係者への聞き取り調査を実施した。本稿は、主に地域の課題解決をめざす人々の実践を通してこうした取り組みをおこなう貴州省少数民族地域の諸事例に注目し、実地調査によって得られた一次資料を整理したものである。

2. 研究の目的と背景

持続可能な社会あるいは持続可能なコミュニティの構築に向けて、わたしたちは何をすべきか。地域の疲弊は自然資本に依存し、時として厳しい自然環境への適応を求められていた地域にとっては、地域コミュニティの衰退が自然資本の劣化を導く。そこで環境面においては、森林、水、流域といった自然資源を維持管理するために、地域社会を持続可能にすることが何よりもまず求められる。また社会面においては、人と自然の境界線を意識しつつ、地域住民が安心して暮らせる自律したコミュニティをいかに住民主体となって構築していくかについて、自然環境の脆弱性、社会環境の変化を前提としたうえで、社会政策上の公正と効率、合理性、安定性といった視点から検討するとともに、経済面においては、地域の経済的自立の方法を探究することが重要である。

日本の経験を紐解くと、戦後日本は、高度経済成長期を経て、都市の過密化と農山村の過疎化といった地域の不均等発展をもたらした。とりわけ農山村における地域間格差は、現代的貧困が重層的に蓄積されている。また人口減少、高齢化、少子化を背景とした地域の疲弊は、従来から議論されてきた過疎問題やそれに派生する地域社会の弱体化にもかかわり、同様の現象は中国をはじめとした東アジアの急速に

経済発展を遂げた地域にも共通である。こうした地域の持続可能性に着目した研究として、例えば、大塚編（2015）がある。また竹歳・藤田編著（2011）では中国貴州省を典型地域として、中国貧困省の持続可能な発展に向けた社会経済学的な研究をおこなっている。これらの先行研究は、環境変化の中での地域の課題をいかにして解決すべきかについて、実地調査を踏まえた上で考察している。

本稿では、地域社会の疲弊が地域の文化や伝統の維持を困難にしている点、地域の持続可能性を議論する際には、地域の経済的自立が欠かせない点の双方に着目しており、地域社会および経済、環境をリンクさせ、地域、環境、社会問題に関する人々の実践と政策の相互作用について、中国貴州省少数民族地域を対象として実地調査による複数の事例の比較検討による経済社会学的アプローチを総合的におこなうことを目的としている。このため、本稿では持続可能なコミュニティの創出可能性を検討するにあたり、自然との共生に根ざした文化・伝統の維持と経済的自立の両立の現状と課題について、中国貴州省で実施した2回にわたる現地調査をもとに、その成果とインプリケーションをまとめるものである。

3. 貴州省の社会経済発展と少数民族地域における社会的企業の萌芽

『2019年貴州統計年鑑』²⁾および王主編（2019）に基づき、貴州省の概況を簡単に紹介しておこう。貴州省は中国西南部に位置し、四川省、重慶市、湖南省、広西チワン族自治区、雲南省に囲まれた内陸省である。地形は山がちで、省西部の標高が高く省東部の標高が低くなっており、高原、丘陵、盆地から成っている。傾斜地が多いためあまり農業生産条件には恵まれていないが、森林資源が豊富で希少な野生の動植物や薬草など生物資源の宝庫である。気候は亜熱帯性気候で、主な農産物は水稻、トウモロコシ、キノコ類、茶、薬草などである。行政区画としては2018年末時点で9地級単位（6地級市、3自治州）、88県級単位（52県、11

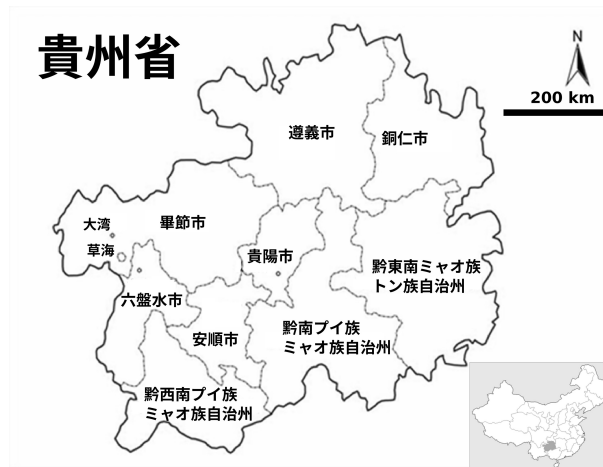


図1 貴州省ならびに貴州省行政管轄図

(出所) 任曉冬教授(貴州師範大学)より提供された地図を基に松永作成。

自治県、9県級市、15市轄区、1特区)、1381郷鎮級単位(837鎮、227街道弁事処、317郷)、4189社区居民委員会と1万3295村民委員会を管轄している(図1)³⁾。省の人口は3600万人、省政府は貴陽市におかれている。56もの民族が居住しており、2009年末時点で全省の人口に占める少数民族人口の比率は39%である。主な少数民族としては最大のミャオ(苗)族(429万9900人、省人口の12.2%)を筆頭に、ブイ(布依)族、トン(侗)族、トゥジア(土家)族、イ(彝)族、グーラオ(仡佬)族などが挙げられる。また、独特のカルスト地形や、少数民族の文化を生かした観光業が発展している。

経済発展についてみると貴州省は中国で最も貧しい地域のひとつであり、2017年の1人あたり可処分所得は都市住民が2万9080元、農村住民が8869元で、全省・直轄市のランキングでいずれも下から第2位となっている(なお、最下位は甘粛省)。第12次五か年計画以来、貴州省は貧困削減に力を入れており、以下に述べる中央政府による貧困線の定義(1人あたり年間可処分所得)の変更の影響を除けば、2000年代以降貧困人口は着実に減少してきている。2007年の貴州省における農村の貧困発生率(貧困線を下まわる人口の比率)は6.5%、貧困削減事業の対象となっている貧困県では

8.1%まで低下していた。ところが、2008年と2011年に中央政府が貧困線の基準を、1人あたりそれぞれ年間可処分所得1196元、2300元へと段階的に引き上げたため、貴州省における農村の貧困率はそれぞれ15.0%、33.4%(貧困県では40.6%)に上昇してしまった。その後、農村の貧困人口は徐々に減少しており、2011年から2017年までに、貧困人口は1149万人から248万5100人に、貧困発生率は33.4%から7.8%まで減少した。ただし、それぞれの時点での全国の貧困発生率は、2011年が12.7%、2017年が3.1%なので、貴州省は依然として多くの貧困人口を抱えているといえるだろう。

中国西南部の内陸に位置する貴州省が経済発展から取り残されている要因は、かつての中国の経済発展の負の諸側面が集中してあらわれているものと考えられる。その理由として、経済発展が著しい沿海地域から遠隔の内陸地域にあるという地理的条件、少数民族の人口比率が高いことがあげられる。また、資源収奪型国有企業のウェイトが高いことから、かつての急速な経済発展の負の諸側面が集中していることがあげられる(竹歳・藤田編著(2011))。

このような問題を解決するために、自然生態系の保全が現地に住む人々の活動と密接な関係にあることから、現地の人々の貧困問題の解

消なくして自然生態系保全は達成できないという仮説のもとで、貧困対策と環境保全をめぐる問題への社会科学的アプローチが試みられている。例えば、貴州省草海におけるマイクロクレジットの試行や、参加型農村開発手法であるParticipatory Rural Appraisal (PRA) を用いた貴州省における貧困対策プロジェクトがあげられる(任等編著(2005))。

王・王(2013)は、貴州省の代表的な少数民族であるミャオ族の手工芸文化の記録・保全とその手工芸品の市場アクセスの公正化を図る実践的な研究活動の成果を示した。研究対象地域では、シティグループ財団の助成のもと、貴州師範大学自然保護・社区発展研究センター、貴州日報及び貴州省人類学学会により、黔东南ミャオ族トン族自治州の榕江县におけるミャオ族村を中心に共同で研究が実施されている。貴州省の少数民族が抱える貧困問題は、以前と異

なり、現在は衣食住など最低限のニーズは満たされてきたが、都市住民との経済格差は依然として大きく、伝統的な住居の維持や子どもの教育などに一定の現金収入が欠かせないことにある。王・王(2013)の事例研究は、地域の伝統文化をグローバル化する現代社会に接続していくことで、人々の生活改善をいかに向上させていくことができるのかという点で重要な試みであり、ここにソーシャルビジネス(社会的企業)の萌芽をみることができる。

4. 2017年調査

4.1 調査概要

2017年8月28日から9月1日の日程で、貴州省における現地調査を実施した⁴⁾。対象地域は、銅仁市石阡県、銅仁市思南県、黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県である。調査の概要を表1に示す⁵⁾。

表1 2017年調査概要

| 調査日 | 調査先 | 調査地域 | 民族 | 経済組織 | 生産品・工芸品 | 社会的課題 |
|-------|-----------------|--------------------|--------------------|------|-----------------------|----------------------|
| 8月29日 | 佐老印染專業合作社 | 銅仁市石阡県大沙壩郷埃山村 | グーラオ(仡佬)族 | 合作社 | 手工芸品(型染め) | 文化の保護と地域の経済的發展 |
| | 石阡祥豊文化生態農民專業合作社 | 銅仁市石阡県大沙壩郷余家寨村 | モンゴル族 グーラオ(仡佬)族 | 合作社 | 果物 | 地域の経済發展と生態環境の保護、留守児童 |
| | 龍塘省級高効生態茶示範園区 | 銅仁市石阡県龍塘鎮、龍井郷の20ヶ村 | グーラオ(仡佬)族 | 合作社 | 茶 | 地域の経済發展と文化の保護 |
| 8月30日 | 思南県致遠生態農業專業合作社 | 銅仁市思南県思林郷中岭村 | 複数の少数民族 | 合作社 | 茶 | 生態農業(茶栽培)の導入と地域の経済發展 |
| | 貴州九木和集文化伝播有限公司 | 貴陽市(貴州師範大学) | 回族 漢族 | 公司 | 手工芸品(ろうけつ染め)、銀細工、陶器など | 文化の保護 |
| 8月31日 | 萍霞蜡染坊 | 黔东南自治州丹寨県県城 | ミャオ(苗)族 | 工房 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |
| | 楊武中学 | 黔东南自治州丹寨県楊武郷 | — | — | — | 教育による文化の継承 |
| | ろうけつ染め工房 | 黔东南自治州丹寨県楊武郷排倒村 | ミャオ(苗)族 | その他 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |
| | 民宿を兼ねたろうけつ染め工房 | 黔东南自治州丹寨県楊武郷排莫村 | ミャオ(苗)族 | その他 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |
| | 排莫村蜡染合作社 | 黔东南自治州丹寨県楊武郷排莫村 | ミャオ(苗)族 | その他 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |
| | 排莫村婆媳蜡染制作示範基地 | 黔东南自治州丹寨県楊武郷排莫村 | ミャオ(苗)族 | その他 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |
| | ろうけつ染め店舗 | 丹寨県万達小鎮 | ミャオ(苗)族 | 合作社 | 手工芸品(ろうけつ染め) | 文化の継承と就業・収入の確保 |

以下本節では、地域資源をいかした生産活動をおこなっている合作社の展開状況について2017年調査をもとに(1)外部資金によるプロジェクトとして世界銀行プロジェクト支援による合作社、(2)商品開発についての都市と農村の連携の事例として貴州九木和集文化伝播有限公司、(3)地域の内発的な取り組みと開発ディベロッパーによる新たな展開として、ろうけつ染めが民族の歴史、文化、生活と密着している黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県の諸事例について整理をおこなう。

4.2 外部資金によるプロジェクト支援

4.2.1 世界銀行によるプロジェクト支援

貴州省少数民族地域では世界銀行による貴州省農村発展プロジェクト⁶⁾による支援が行われており、地域資源をいかした合作社の設立がすすんでいる。

筆者らは2017年、図2に示す世界銀行プロジェクトのうち、銅仁市石阡県大沙壩郷埃山村に思南県思林郷地域の4つの合作社について調査を実施した。

世界銀行プロジェクトの中国側専門家チームのリーダーである任曉冬教授(貴州師範大学)によると、世界銀行のプロジェクトの手続きに

ついては、世界銀行内部のプロセスと国内のプロセスが重なるため、手続きが煩雑になっているという。また専門家チームが県扶貧弁公室で了承したプロジェクトを世界銀行に提案して世界銀行の了解をとるとともに、扶貧弁公室系統の許認可を下から上にあげていかなければならない。なお世界銀行のプロジェクトの合作社は、貧困農家を80%含まなければならないという条件がある。任教授によると、世界銀行のプロジェクトでは流動資金には援助しないため、別途資金の手当が必要であるという。

4.2.2 仡佬印染專業合作社(銅仁市石阡県大沙壩郷埃山村)

仡佬印染專業合作社(以下、合作社)の調査をおこなう前に、グリーンツーリズムを目的として農家が経営する観光施設「農家楽」にて、郷長など地元の政府幹部、型染め(「印染」)の染色合作社理事長らに聞き取りを実施した⁷⁾。

合作社(図3)では、型染めの製造に必要なインディゴ⁸⁾を栽培している。葉を水に浸してできる液体の沈殿物(「藍靛」)が染料に使われる。昔は化学薬品が存在しなかったので、すべて純粋な天然の植物由来の原料を使っていた。添加剤として植物を焼いたアルカリ性の灰



図2 世界銀行プロジェクト地図

(出所) 任曉冬教授(貴州師範大学)より提供された地図を基に松永作成。



図3 佬侗印染專業合作社入口

(出所) 2017年8月29日撮影¹³⁾。

を加える。布の花模様は、豆腐に少量の石灰を加えたもので作る。その布を花模様の穴の開いた木製の型である花板で覆う。花板は、伝統的な図案と現代的な図案を結合させ変化させている。デザインや販売部門は貴州九木和集文化伝播有限公司⁹⁾でおこなっており、所在地は省都の貴陽市である。衣服、装飾、インテリア用品など多様な製品のデザインをおこなっている。生活用品、観賞用などおおよそ布を使うものであれば、どのようなものでも作成できるといふ。今後、作品を国内外に広めたいという希望がある。

合作社の理事長はグーラオ族で、年齢は45歳である¹⁰⁾。理事長の親の世代は一部の人が、祖父の世代はそれ以上のより多くの人が、曾祖父の世代はすべての人がろうけつ染めをできたそうである。現在、天然の製品が良いと考えられているため、ろうけつ染めに工業製品とは異なる再評価を期待したい、という。

現在、合作社の発展において、不足しているのは資金である。もともと型を使った藍染めをしたいと計画していたが、資金不足で難しかったという。そこに世界銀行のプロジェクトの話があり、そのチャンスをつかみ合作社を創業した。銅仁市石阡県の文化部外資中心が合作社を作らないかと声をかけてきたためである。現

在、埃山村（行政村）の178戸が合作社に参加している。理事長は選挙で社員から選ばれる。理事長は過去にこの村の村人のために、例えば養鶏技術や販売などたくさんの援助をしてきたので信頼関係があり、理事長に選出されたようである。

合作社がある埃山村には9の村民小組がある。理事長は養鶏を営んでおり、現在1万羽以上の採卵鶏、豚などを飼育している。主な業務は鶏のヒナの販売、養鶏技術の指導などである。理事長は若いころ、広東省に出稼ぎに行っており、そこでビジネスにかかわるノウハウを取得したようである。

合作社のろうけつ染めの工房には、染色に使う木製の樽、染料を温めるために石炭を入れる金属製の使い古したようなバケツ、染め上がった布を絞る道具などがあった。木製の道具は全て村の職人による手作りだが、技術を持つ人が少なくなったそうだ。合作社ではろうけつ染めの染料であるインディゴの原料となる、板藍根を生産しており、今後より多くの村民を参加させて生産面積を400畝（ムー）¹¹⁾に拡大する予定である。板藍根は3年に1度、抜根して植え替える必要がある。

次に合作社の近くの、ろうけつ染め技術者の家を訪問した。100年ほど前に建てられた大きな木造住宅に老夫婦と、息子らしい40代の男性がいて、作った布（作品）を見せてくれた。なかには数十年前に作られた布もある（図4）。



図4 型染め古布

(出所) 2017年8月29日撮影。

村の中にはいくつか農家楽を経営し、旅行者を宿泊させている農民がいる。訪問した家も最近、農家楽を始めたが、村内の農家楽経営から、やや出遅れたようだ。任教授によると、銅仁市石阡県では世界銀行プロジェクトの9つの合作社を管轄しているという。農産物の合作社が多く、生産している作物は果物、野菜、茶などが多い。筆者らが訪問した合作社は、伝統文化の合作社であり、農民の収入を増やすことが目的である。現在、3つの村の産業に2人ずつの指導員、合計6人を派遣している。

郷政府の担当者である石阡県扶貧外資中心主任によると、合作社づくりにとって人材育成が重要であるため、すでに1万人以上を対象に研修を実施したという。現地は人材が少なく、ある程度の教育年数が高い人や考えがしっかりしている人はみな村から外へ出ていくため、地元で合作社を設立するのは難しい。地元に残っているのは老人や子ども、健康に問題がある人などである。世界銀行のプロジェクトでは、製品の買い取りプロセスなど、全ての過程で透明性が重視される。世界銀行プロジェクトの投資規模は1件あたり400万元から600万元、なかには1000万元以上の合作社もある。低利融資が行われている。返済は貴州省政府がおこなっている。融資を受けた合作社は加工工場などに投資できるほか、流動資金を提供している。沿海地域の合作社はもとと出資額が大きく、輸出志向も強い。それに対して貴州省は農民が貧しいので現金出資はできない。地域のなかで比較的能力のある人に、他の農民をリードしてもらうという。銅仁市石阡県は貧困県であり、人口46万人のうち農村戸籍人口は39万人である。少数民族の比率は70%で、トン族、グーラオ族がいる¹²⁾。

4.2.3 石阡祥豊文化生態農業專業合作社（銅仁市石阡県大沙壩郷余家村）

石阡祥豊文化生態農業專業合作社（以下、合作社）では、秘書長から聞き取りを実施した¹⁴⁾。秘書長は貴陽市で働いていた時、夫の出身である余家村の荒地を有効利用できるのではない

かと思うようになったのが、事業を起こすきっかけであったという。もともとこの土地では、農民はトウモロコシや水稻を植えていたが、出稼ぎ者が増え、荒地地となっていた。

合作社の紹介パネルにある完成予想図（図5）をみると、敷地内の斜面に果樹園、下に養魚池、ホテルがあるという壮大なものであった。訪問時点ではまだホテルも建設中、果樹園もできていない（図6）。果樹園では果物狩りができるようにしたいと考えており、1年を通して営業できるようにサクランボ、梨、スモモ、文旦（「柚子」）、棗（ナツメ）、冬はハウスのイチゴなど、収穫期の異なる果物を組み合わせる予定である。合作社では果物生産の技術がないので専門家を招聘しているという。養魚池では、鯉



図5 石阡祥豊文化生態農業專業合作社の紹介パネル

（出所）2017年8月29日撮影。



図6 合作社による建設中の建物

（出所）2017年8月29日撮影。

などを育てている。10年後に全てのプロジェクトが完成する予定である。

余家村は183戸あり、このうち86戸が貧困戸である。村民小組が全部で10組あるが、このうち8組の2000人が合作社に参加している。参加者の民族構成は、モンゴル族とグーラオ族が半々である。同地域では、1990年代から広東省への出稼ぎ者が増え始め、のちに浙江省へ行く出稼ぎ者が増えた。それにともない留守児童の問題が、ここ数年深刻化している。貴州省銅仁市石阡県では次世代工作委员会を設立し、対策にあたっている。幼稚園は6つあり、3歳から7歳までが入れる。同地域には、小学校は全学年がそろっている学校（「完校」）と、2年生までしかない小学校が、合わせて4校ある。1校あたり200人から300人の生徒がおり、うち40%が留守児童である。

世界銀行のプロジェクトが始まる前は、貧困対策資金として、石阡県の扶貧弁公室から1村につき30万元を補助するというプロジェクトが存在した。合作社はもともとその事業に関わっていた。このプロジェクトでは短期投資として95万元を借りている。

合作社は、地域の経済的発展と生態環境の保護、留守児童の解消といった社会的課題を解決するために活動する社会的企業であると考えられる。

4.2.4 龍塘省級高効生態茗茶示範園（貴州省銅仁市石阡県龍塘鎮、龍井郷の20ヶ村）

龍塘省級高効生態茗茶示範園（以下、示範園）では、示範園の理事長¹⁵⁾、国家一級茶芸士らから聞き取りを実施した。示範園は巨大なモデル農園と観光施設を併合している（図7）。斜面に固有種を含め数種類の茶が植えられている。グーラオ族の居住地域に立地している。

2015年に示範園に合作社が設立された。7つの行政村、50村民小組、1万2600人が参加しており、1万5000ムーの茶園を経営している。この地域の農地請負面積は、1人あたり1ムーである。合作社のコンセプトは、①環境と文化保全、②森林（1000ムー）と茶園と庭園の結

合、③農業と観光業の結合、の3つである。農民1人あたり純収入は、合作社設立前の2009年から現在までに、9000元から1万元に増加している。農地の経営方法は3種類あり、第1は合作社による直接経営、第2は台湾企業など3つの企業への土地のレンタル、第3は農民による個別経営（農作業請負サービスを提供する）である。なおレンタル地代は、1ムーあたり300元である。

示範園の合作社が経営する茶園は1530ムー、社員は216戸（うち貧困戸は118戸）である。技術指導には世界銀行の専門家の1人が派遣されてきた。合作社では中国の有機認証を取得している。2015年に設立後は資金上の困難があり、2017年5月によりやく初めての販売にこぎつけた。初回販売量は10トン。2018年は500トンを目指している。製品は全国各地に向けて販売しており、SCS基準¹⁶⁾を満たしている。

示範園の合作社の社員のうち、12人は管理職、うち9人が理事等の経営陣である。もともと中間商人を介して製品を販売していたが、それを取りやめ、合作社が直接販売するようにした。当時は中間商人から販売額の10%のマージンを取られていた。灌漑は地下水を利用して、一般農民の参加条件は、技術があること、規範化された技術体系を守って生産することである。これまで違反して退会した農民も、少ないが存在する。統一的な品質基準に則って、買取をおこなう。生産資材の供与もおこ

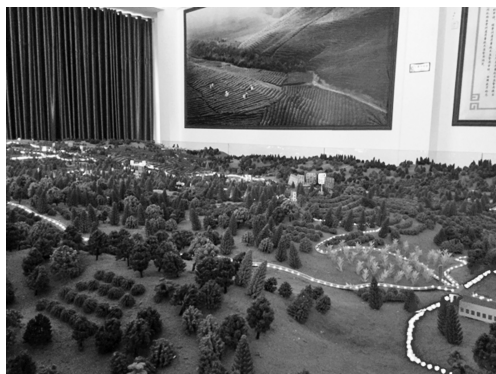


図7 龍塘省級高効生態茗茶示範園のジオラマ
（出所）2017年8月29日撮影。

なっている。なお生産資材の支払いは収穫後であるという。通年雇用は30数人、1日の賃金は80元から100元、茶の収穫期は短期雇用が数百人、出来高制である。こうした雇用労働者は中高年中心で、60歳から最高年齢で90歳の人がいる。また地元の人を雇用している。茶園経営による1ムーあたりの純収入は、合作社成立前後で2000元から3000元に増加した。品質の向上、販売方法の変化が要因である。この茶園は、古くは漢代、唐代から茶が栽培されていた、歴史ある茶園である¹⁷⁾。

園内では地下水を直接飲めることから、現在、ドイツからミネラルウォーターの企業が来て水の販売を交渉中である。他方で住民の水源を守ることも重要であるという。

4.2.5 思南県致遠生態農業專業合作社（銅仁市思南県思林郷中岭村）

思南県致遠生態農業專業合作社（以下、合作社）では、合作社の理事長¹⁸⁾、執行董事（貴州思創実業發展有限公司）、思南県政府外資中心スタッフから聞き取りを実施した。理事長は2006年に広州の華南農業大学に入学、獣医学を専攻した。在学中に合作社に興味を持ち始め、大学卒業後の2010年に出身地の思南県に戻り、地元の農民が豊かになるよう導くため、合作社を設立したいと考えたという。理事長はまず2011年に深圳で合作社を設立したが、協同組合というより個人企業に近いもので、結局失敗に終わった。次に2015年にこの合作社を設立したが、2017年3月3日に世界銀行による合作社を支援するプロジェクトが認可され、これに参加する機会を得た。世界銀行の融資額は、約200万元である。

合作社が管理する農園の総面積は2300ムーで、このうち茶園は600ムーである。銅仁市思南県は山がちな地形で、海拔は230メートルから1180メートルと、高低差が大きい。同地域の気候は茶の生産に適しており、高品質の茶が生産できる。合作社では、農園内の海拔が高いところでは茶、中間では果樹、低いところではハスを植えたり魚の養殖をしたり、地理的条件

に応じて多様な品目を生産している。水田には泥鰌、七星魚（地域の固有種）などがおり、聞き取りを実施したオフィスの中にもこれらの魚を飼育するプールがあった（図8）。

合作社の茶園は統一的に管理され、生産物は合作社が全量を買取り、販売する。生産資材は無料で生産者に提供される。600ムーの茶園は30の「小区」に区切られている。「小区」の大きさにはばらつきがあり、最大200ムーから300ムーのものもある¹⁹⁾。農民が得られる収入源は、1ムーあたり400元の地代と配当である²⁰⁾。まだ合作社は設立されたばかりで赤字のため、今後、利潤が出れば出資した土地面積に応じてメンバーに配当が支払われる。茶園はEUの有機認証を取得している。

合作社の社員の年齢層は60歳代、70歳代の高齢者が多く、民族の構成は、トゥジア族40%、ミャオ族20%、グーラオ族10%となっている²¹⁾。理事長は、今後は山村の観光地として発展させたいと考えている。プロジェクトに参加しているのは2つの村、356戸である。このうち87戸が貧困戸であり、貧困戸のうち子供と女性しかいない生活保護世帯である「五保戸」が2戸含まれている。

貴州思創実業發展有限公司は合作社と協力関係にある企業で、技術指導、農業資材の提供、マーケティング（ブランドづくり、広報）を担当している。貴州思創実業發展有限公司は



図8 思南県致遠生態農業專業合作社内の飼育プール

（出所）2017年8月30日撮影。

2015年に正式に登録したグループ企業の子会社で、正規職員は400人から500人、雇用している労働者は3000人、出資金は5000万元である²²⁾。

4.3 都市と農村の連携

4.3.1 貴州省における都市と農村の連携モデル

貴州省では、これまで様々な政府レベルで貧困対策が実施されてきた。中国における世界銀行プロジェクトは政府主導だが、なぜ文化に関する合作社の支援に重点を置くのだろうか。

任教授によると、ミャオ族は1万年も前から棚田を作り上げており、農耕を中心とした生活の中で、自然環境をいかしたろうけつ染めなどの文化と歴史を築いてきた。世界銀行の第1次プロジェクトでは7つの合作社を設立しており、当初の目的は貧困削減、環境、技術改善だったが、そのプロセスで文化保全という要素が加わったという。ミャオ族は伝統文化という点で高い評価を得ており、特にろうけつ染めは200年以上の歴史を持つ手工業として高く評価されている。

こうした民族地域の伝統文化と歴史に根差したろうけつ染めは、ミャオ族自身が自信と誇りを持って取り組む点で地域振興にふさわしい。ミャオ族地域におけるろうけつ染めを核とした手工業の展開は、貧困削減のみならず、民族地域の伝統文化と歴史を継承しつつ、経済的自立を促すことから、コミュニティビジネス、あるいはソーシャルビジネス（社会的企業）として評価できる。またこうしたコミュニティビジネスを継続するために、シティグループ財団や貴州師範大学といった専門性を持つ支援者が、都市と農村をつなぐ橋渡し人（バウンダリースパナー）となり連携、協働し、資金調達や商品開発といった経済活動のノウハウについて指導するとともに、いかにして伝統文化の価値を共有し、それを保全する取り組みを現地の住民たちと実践していくのか、調査地域での取り組みは萌芽的であるが、これらの活動を積極的に評価したい。

4.3.2 貴州九木和集文化伝播有限公司（貴陽市（貴州師範大学））

貴州九木和集文化伝播有限公司では李瑋総経理²³⁾、王小梅氏、貴州日報社、趙怡氏から聞き取りを実施した。貴州九木和集文化伝播有限公司は貴州師範大学構内にあるデザイン会社兼工房である。ミャオ族の伝統工芸品であろうけつ染め、銀細工、陶器などを制作している。ろうけつ染めは村の女性たちに注文して生産しており、デザインについては指導している。総経理自ら紹介してくれた作品は、いずれもモダンでお洒落なものばかりであった（図9）。さらに他の民族文化、例えば漢民族の生活、文化に根差したデザインや商品の開発も行っていた



図9 洗練されたデザインの提案（貴州九木和集文化伝播有限公司）

（出所）2017年8月30日撮影。



図10 他の民族文化（漢民族）に対応した作品（貴州九木和集文化伝播有限公司）

（出所）2017年8月30日撮影。

(図10) 貴州九木和集文化伝播有限公司はシ
ティグループ財団の援助をうけており、同プロ
ジェクトでは、海外輸出も視野に入れている。

また近年ではデザインやパターンの盗用、誤
用により、廉価な商品が大量生産され、市中に
出回っているため、貴州九木和集文化伝播有
限公司ではミャオ族の伝統文化、歴史に根差
したデザインやパターンを保全し、制作者の権
利を守るため、それぞれの作品に制作者の顔
写真や



図11 作品と制作者の情報を示したタグ
(出所) 2017年8月30日撮影。

プロフィールがわかるタグ等の情報を付与して
販売している(図11)。作品の生産地や制作者
を明確に記録し、情報を提供するといった一種
のトレーサビリティを確認できるシステムを構
築することで、作品の価値や制作者の権利を守
ろうとしているのである。

4.4 地域の内発的な取り組みと開発ディベ ロッパーによる地域振興の展開

4.4.1 黔東南ミャオ族トン族自治州丹寨県

貴州省の9つの地級行政単位のうち3つは少
数民族自治州(黔南ブイ族ミャオ族自治州、黔
東南ミャオ族トン族自治州、黔西南ブイ族ミャ
オ族自治州)であり、少数民族の居住地となっ
ている(図12)。そのなかでミャオ族は最大の
少数民族集団であり、服装や方言の違いにより
多くの亜族が存在する。本稿の調査地である黔
東南ミャオ族トン族自治州の丹寨県には3つの
ミャオ族が居住する。八寨ミャオは交通の便利
な場所におり、豊かな集落を築いている。この
ほかに白領ミャオ、錦鶏ミャオが居住している。

丹寨県のミャオ族集落では、手工芸品(主に
ろうけつ染め)を制作・販売している主体は個



図12 黔東南ミャオ族トン族自治州

(出所) 任曉冬教授(貴州師範大学)より提供された地図を基に松永作成。

人、企業、パートナー（「合夥」）、合作社など多様である。また、丹寨県では開発ディベロッパーである万達集団（ワンダ・グループ）が黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県楊武鎮にミャオ族のテーマパーク、丹寨万達小鎮を建設し、2017年に開業した。丹寨万達小鎮には、合作社や個人経営者（「個体戸」）が出店している。このほか、丹寨県には2012年に省級経済開発区が建設されたが、企業はあまり入っていない。

丹寨県では楊波氏（苹果園児童助養工作坊）の案内で、ミャオ族の村々で調査をおこなった（図12）。苹果園児童助養工作坊は、2007年に設立されたNGOである。苹果園児童助養工作坊には10の小組がある。そのうち2つの小組は赤十字（「紅十字」）、別に会社（「公司」）として登記した組織が主体となっている。学校や村と直接連携して貧困児童の援助をしている。貧困児童の援助は1人あたり960元である。香港の団体のほか、中国国内にもスポンサーがいる。小組は実務1人、会計1人という分担関係で運営されていることが多い。畢節市にも2箇所のプロジェクトサイトがある。

本稿では、地域の内発的な取り組みとして、丹寨県のミャオ族の集落における多様な経済主体によるろうけつ染めの生産と販売に関する取り組み、地域の教育機関における少数民族文化や歴史に関する教育、開発ディベロッパーによる新たな展開として丹寨万達小鎮におけるろうけつ染めの合作社や個人の出店者に対する聞き取り調査の結果について記す。

4.4.2 萍霞蜡染（黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県県城）

丹寨県の県城²⁴⁾にある萍霞蜡染を訪問した（図13）。萍霞蜡染は老女2人が共同でろうけつ染めを制作している工房である。萍霞蜡染は工房だけで、販売はおこなっていない。伝統的な作品だけでなく、Tシャツやドレスといった衣料品も制作していた（図14）。女性2人は中国語の標準語があまりわからないとのことであった。



図13 萍霞蜡染工房内作業場

（出所）2017年8月31日撮影。



図14 ろうけつ染めによる衣料品

（出所）2017年8月31日撮影。

4.4.3 楊武中学（黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県楊武郷）

楊武中学では校長から聞き取りを実施した。県内には4つの中学校があり、楊武中学は2000年代に建てられた第3の中学である。最も遠い村で66キロメートル離れたところから来ている生徒がおり、校区は自宅からの距離で決まるため、県を越境した通学も可能である。生徒数は1230人で、3つの小学校から進学してくる。83名の教師がいる重点学校である²⁵⁾。宿舎と食事は無料で、すべて政府が負担する。全寮制で、週に1回、自宅に帰ることができる。政府の生徒への食事の補助は56元である。なお中学校は地区で進学先が決められている。

凱里市には高校もあり、5000人の生徒がいる。貴陽市、凱里市、それ以外から来る生徒も

いる。貴陽市なら2時間半で来ることができる。凱里市には政府機関があるため、学生が足りないということはない。学生数は増加し、教育を重視するようになったので、教師も満足しているという。10月にミャオ族大会があり、学校でもミャオ族の伝統文化のろうけつ染め、芦笛などの楽器、踊りや歌の授業など、少数民族特有の教育である少数民族教育がある。女子生徒だけでなく男子生徒も少数民族教育の授業を受ける。中学校の外壁にはミャオ族のろうけつ染め作品がペイントされていた(図15)。生徒が描いた作品だという。



図15 楊武中学外壁
(出所) 2017年8月31日撮影。

人に販売していた。以前は浙江省に出稼ぎに行っていたこともあるが、ここ10年から20年はずっと地元でろうけつ染めをしている。販売額は、年間2万元程度である。A氏の作品は人気があり、すぐに売れるという。ろうで絵を描く作業は、小さい作品であれば1、2日で完成する。大きい作品でも1週間程度で完成する。完成した下絵はテキストがあるわけではなく、A氏のイメージを表現したものである(図17)。ろうけつ染めの技術は16歳のころから母に習ってきた。これまで学校教育を受けたことがない。A氏の世代のミャオ族の女性の7割は学



図16 ミャオ族の伝統的な図案(ろうけつ染めの下絵)
(出所) 2017年8月31日撮影。

4.4.4 丹寨県楊武郷排倒村ろうけつ染め工房 (黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県楊武郷排倒村)

工房では女性(A氏)に聞き取りを実施した。工房は棚田が見下ろせる斜面の上に立っており、景色が良い。A氏は2階建ての木造住宅に住んでいる。ミャオ族の家は一般的に2階建てか3階建てが多く、1階は家畜の飼育スペース、2階が住居となっている。筆者らが訪問した際には入口にインディゴの葉を水に浸したプラスチック製の樽が3つあり、2つはまだ緑色、1つは濃い紺色になっていた。この沈殿物を取り出し、染料にする。ミャオ族のろうけつ染めにはテキストがない。伝統的な図案は制作者のイマジネーションによって作品に表現される(図16)。

ろうけつ染めの布(作品)はもともと地元の



図17 制作中の作品とA氏
(出所) 2017年8月31日撮影。

校教育を受けたことがない。特に30代以上の女性はほとんどないという。

A氏は48歳²⁶⁾。夫はすでに亡くなり、義父と同居している。長男は26歳未婚で浙江省へ出稼ぎに行き、次男は丹寨県で働いている。ろうけつ染めの技術は一般的には自分の娘にしか教えないので、息子に教えることはない。他の家の娘に教えることもない。A氏の実家は三都スイ族自治県のミャオ族の村である。年に2、3回は帰省するという。調査地から1時間半の場所に実家はある。

作品の布も一部は自分で織るが、丹寨県の市場で機械織の布を買うこともある。蜜蠟も市場で塊を買う。1斤²⁷⁾あたり20元程度である。天然のものもあるが、人工的な蠟を混ぜたものもある。古くなると色が暗くなるが、染色には影響ない。

排倒村は土地が少なくA氏の家も0.5ムーしか持っていないため、食料となる穀物は購入している。購入価格は1斤あたり2元ほどである。

4.4.5 民宿を兼ねたろうけつ染め工房（黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県揚武郷排莫村）

丹寨県揚武郷排莫村のろうけつ染め工房は、2014年に政府から4万6000元の補助金を得て企業登記をした。ろうけつ染め工房のほか、民宿経営をしている。1泊50円で宿泊できる。室内には作品が展示されていた（図18）。宿泊客は楊波氏のウェブサイト²⁸⁾やWeChat（「微信」）の情報を見て、国内外から泊まりに来るという。ろうけつ染めの職人である女性が1人で経営している。これまでに欧米から観光客が泊まりに来たこともあるという。筆者らが訪問したのはトウモロコシの収穫の時期であった。この辺りのコメは10月下旬に収穫をする。その後に収穫祭があり、出稼ぎに行っている人も戻ってくる。帰り際に、経営者の夫が魚のたくさん入ったバケツをさげて戻ってきた。近くの川でとった天然の魚（コイの類）である。近くに祠があったが、ミャオ族の先祖崇拝の祠とのことであった。



図18 民宿を兼ねたろうけつ染め工房内の作品展示

（出所）2017年8月31日撮影。

4.4.6 排莫村蜡染合作社（黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県揚武郷排倒村）

排莫村蜡染合作社（以下、合作社）は2017年2月に設立した、3人の女性発起人が運営しているパートナー（「合伙」）合作社である。合作社では、女性発起人のうち1人が不在であったが、王闊果氏、王租芬氏の2人から聞き取りを実施することができた。合作社は村の高台に位置し、完成間近の作品が外干しされていた（図19）。合作社の年間売り上げは3万8000元である。政府から4万円の補助を受けている。主なコストは人件費である。合作社の雇用労働者は15人、給料は2000元から3000元である。王闊果氏の夫は省外で出稼ぎをしており、ろうけつ染めの販売もおこなっている。以前は丹寨



図19 排莫村蜡染合作社

（出所）2017年8月31日撮影。

県のろうけつ染め企業で働いていた。

2階に作品を展示する部屋がある。ろうけつ染めの普段着や布の他、晴れ着もある。晴れ着は半纏のような上着を2枚重ねて着る。全体は黒っぽい撥水布でできており、襟や肩のあたりに刺繍が施されていて、上腕にろうけつ染めがほどこされるなど、色鮮やかであった(図20)。

王租芬氏の夫は村の幹部であり、合作社の名義上の代表となっている。王開果氏の中学3年生の息子がウェブサイトを作り、宣伝してくれているので、北京の人がウェブサイト上の電話番号をみつけて連絡してきて、買ってくれたこともあるという。この息子は郵便局から作品を宅急便で顧客に送るのを手伝ってくれた。将来もこの仕事を手伝ってくれるのか、進学するのかは未定である。18歳の娘は、すでに結婚して家を出ている。



図20 ろうけつ染めの晴れ着を着る王開果氏
(出所) 2017年8月31日撮影。

4.4.7 排莫村婆媳蜡染制作示範基地(黔东南 ミャオ族トン族自治州丹寨県揚武郷排 莫村)

排莫村婆媳蜡染制作示範基地は村民委員会の建物の中で、ろうけつ染め作品の展示ならびに販売をしている(図21)。十数世帯が参加している。2014年から販売を開始し、年間の売り上げ額は15万元程度という。9割の村民はろうけつ染めの技術を持っている。ろうけつ染めにはテキストがなく、制作者のイメージションから作品が生み出されるため、他の少数民族



図21 排莫村婆媳蜡染制作示範基地内の作品
展示

(出所) 2017年8月31日撮影。

から嫁いだ嫁が姑からろうけつ染めの技術を学び制作したことによる、伝統的でありながら新たな要素を付加した作品も展示されていた。近くには商店街があり、刺繍用の糸や刺繍のついたバンドなどを販売している。機械織のものは安く、手作りのものと大きな価格差が存在した。

4.4.8 丹寨万達小鎮(黔东南ミャオ族トン族自治 州丹寨県)

丹寨万達小鎮は万達集団(ワンダ・グループ)により建設された、巨大なミャオ族のテーマパークである(図22)。ろうけつ染めや銀細工の装飾品(「銀飾」)、紙製品など、伝統的な手工芸品を扱うアンテナショップも多数入店し



図22 丹寨県万達小鎮
(出所) 2017年8月31日撮影。

ている。丹寨万達小鎮内には、ホテルやレストラン、ミャオ族の伝統的な手工芸品や食料品、医薬品を扱う店舗などがあり、丹寨万達小鎮内でおこなわれるパレードでは、多彩な民族音楽を奏でながら、多様な民族衣装を身に着けた若い男女による、民族舞踊や歌謡などのパフォーマンスが披露されている。伝統的な手工芸品を扱う店舗でのろうけつ染めの作品は、ショルダーバッグで400元以上、服は数百元であった(図23)。



図23 丹寨万達小鎮内のろうけつ染め店舗

(出所) 2017年8月31日撮影。

丹寨万達小鎮では非物質文化遺産代表传承人である楊芳氏の店舗において、楊芳氏から聞き取り調査を実施した。店内にはろうけつ染めの歴史、作品の展示のほか、観光客の体験コーナーもあった(図24)。楊芳氏は出身の村にも家があるが、現在は丹寨万達小鎮近くの移民住宅区に一戸建ての木造住宅を建設して住んでいる。楊芳氏はろうけつ染めを小さいころから学び始めた。ろうけつ染めには教科書も図案もない。図案はすべて制作者の頭の中にある。現在では、若い人も専門学校で習っており、男性も学んでいるという。しかしながら学生の中でも、成績の良い生徒は受験勉強で忙しいのでろうけつ染めは習わないのだという。

楊芳氏は丹寨万達小鎮に2017年7月2日か



図24 非物質文化遺産代表传承人・楊芳氏店舗内の体験コーナー

(出所) 2017年8月31日撮影。

ら入店した。週末は客がとても多い。10数台の大型観光バスが来る。客には外国人も多い。販売価格は作品によって異なる。作者が自分で価格を決める。価格を決めるうえで同業者の作品とあまり比較はしないという。合作社は数百戸参加しており、9つの村からの40数名が作品を制作している。もともと2004年に協会という形でスタートし、2009年に正式に合作社として登記した。協会の時は民政局に登記し、税金もかからなかったが、正式に合作社になったからは工商局に登記し、納税もしている。

店舗の家賃は、ディベロッパーである万達集団から1年目は無料の優遇策を受けている。内装、電気代等のみ自己負担である。営業時間は9時から22時である。開店が遅れても、早く閉店しても万達集団から罰金を取られる。現在、店舗では、2人のシフト制で、交代で店番をしているという。

5. 2018年調査

5.1 調査概要

2018年8月27日から9月2日の日程で貴州省における現地調査を実施した²⁹⁾。対象地域は黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県ならびに丹寨県である(前掲、図12)。

調査対象地域である黔东南ミャオ族トン族自治州はミャオ族が多く居住している地域である。JBIC円借款事業もここから始まり、比較

的貧しい地域で、少数民族が多い。特定産業は少ないが、森林資源と伝統文化が豊かな地域である。

調査対象地域はすべてシティグループ財団による支援を受けており、合作社が中心である。刺繍やろうけつ染めなどの手工芸品を生産し、集団で農民の発展をはかる取り組みがなされている。農民專業合作社³⁰⁾、村民小組など協力の方法により組織が異なっている。特に対象地域とした丹寨県、雷山県は手工芸品の合作社が多い。同行した Horowitz 氏は4年間に及ぶ調査対象地域における現地調査を実施している。また同地域は、有名な観光地でもある。

雷山県の調査対象地は最後に JBIC が支援した地域でもある。もともとは農民を通じ、農業と牧畜に支援していたが、土地、環境に限界があるため、現在では銀細工の装飾品（「銀飾」）を作っているところが多い。また刺繍で生計を立てている農民もいる。筆者らは1000世帯のミャオ族がいる村を訪問した。観光地が多いので、手工芸品の制作で生計を立てているようである。なお丹寨県は手工芸品の制作により生計を立てている農民がさらに多い地域である。

2018年調査では、複数の合作社を調査比較した。同地域の農民は、村と県域を行き来し、農業が忙しい時に帰ってくる。手漉きの紙を作っている合作社がこれにあたるという。また2018年調査では、合作社よりもインフォーマルな生産者組織である農民協会（farmers' association）にも着目した。

農村部では、村のツーリズムについても調査した。2018年から郷村観光を始めており、トイレなどの修理もしているという。丹寨県楊武郷排莫村では村の様々な手工芸品の制作現場をみることもできた。また2018年調査では、基加村花旗（Citi Bank）貴州手工業發展プロジェクトの拠点に滞在することで、プロジェクトに参加している手工藍染協会の会員にも聞き取り調査を実施することができた。

5.2 雷山県³¹⁾における伝統文化産業の展開

5.2.1 中国雷山苗族銀飾刺繍博物館

楊波氏とともに中国雷山苗族銀飾刺繍博物館の現地視察を実施した（図25）。銀細工の国家級伝承人である楊光賓氏に聞き取り調査を実施した。同博物館には、仕事場、作品の展示・販売、観光客の体験スペースなどもある。同博物館は政府の援助で建てられた木造の建物で、正面には「雷山県脱貧攻堅投資基金有限責任公司」、「雷山県豐元農業信用担保有限公司」などの看板もあった。



図25 中国雷山苗族銀飾刺繍博物館

（出所）2018年8月29日撮影。

楊光賓氏と李嵐氏から同博物館について説明があった。作品のデザインは、銅鼓、魚、胡蝶、龍などを抽象化し、それらの特徴を誇張したものである。ミャオ族の龍は20種類以上あり³²⁾、龍の中には人が入っており、人と龍は変換可能であると考えられている。作品は古くなると燃やしてしまうため、あまり古い作品は残っていない。刺繍を切り貼りした立体的な「貼繡」、「破線繡」³³⁾、麻布やシルクを使ったもの、細かいプリーツの入ったスカートなどが展示されていた（図26）。花嫁がかぶる銀細工の装飾がほどこされた冠は4キログラムもあり、花嫁が盛装すると他の装飾品もさらに身に着けるため、重くて身動きが取れないという³⁴⁾。銀は経済的な豊かさを象徴するものであるという。

楊光賓氏は50歳³⁵⁾。43歳の時、初の銀細工の国家級伝承人に認定された³⁶⁾。楊光賓氏は



図 26 ミャオ族盛装の展示
(出所) 2018 年 8 月 29 日撮影。

控拝村出身で、13歳の時に父から銀細工を習い始めた。銀細工の技術を継承しようとしている若者はたくさんいる。楊光賓氏の息子は大学で、西江で働いている³⁷⁾。楊光賓氏は文化庁の国際交流をきっかけに普通話³⁸⁾を勉強した。隣に刺繍の工房が併設されており、髪を結ったミャオ族の女性たちが作業をしている。

5.2.2 雷山県国家級非物質文化遺産名録苗族芦笙制作技芸伝習所

雷山県国家級非物質文化遺産名録苗族芦笙制作技芸伝習所（以下、伝習所）では、芦笙（「芦笙」）を制作する国家級传承人の莫厭学氏³⁹⁾を訪問した（図27）。莫厭学氏は4代目で2007年に国家級匠として認定された。貴州省では莫厭学氏しか芦笙の正式な传承人はいない。省外の人や子どもで芦笙を習う人はいらる。学校で授業はあるが、教えていく過程でたくさんの方が

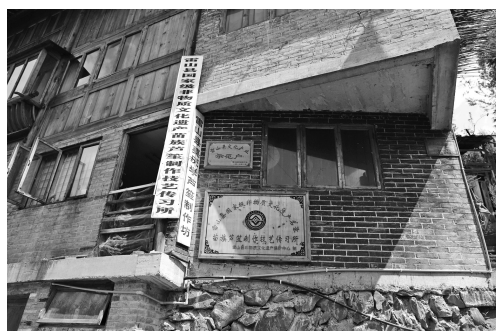


図 27 苗族芦笙制作技芸伝習所
(出所) 2018 年 8 月 29 日撮影。

失われる。笛づくりは15歳あるいは16歳のころから習いはじめた。文化大革命で勉強の機会がなかったそうである。1980年代以前は貧しかったため、芦笙を制作することがあまりできなかった。1980年代から本格的に芦笙を制作しはじめた。材料の竹は500グラムあたり10円で広西チワン族自治区から買ってくる。購入した竹のうち、50%しか竹笛に使えないという。以前は元宵節から7月の節気までの間に笛を吹くと、その期間に何かあると笛のせいにするので吹けなかった。いまは結婚式、新築祝いなど、いつでも呼ばれたら吹きに行く。芦笙は2日半で制作出来る。芦笙は1つあたり500円で販売する。1ヶ月に2000元、1年に30万円の純収入がある。芦笙はWeChatでも買い付けがある。先にお金が届いてから注文の電話を受けることもある。芦笙は南方では問題ないが、北方では乾燥して割れるので使えない。

伝習所は自宅を兼ねた小さな工場で、女性1名が手伝っている（図28）。本体部分に穴をあげる工程はドリルでおこなっているが、他は手作業である。都市部の民族レストラン、学校などで需要があるとのことである。



図 28 苗族芦笙制作技芸伝習所作業場
(出所) 2018 年 8 月 29 日撮影。

5.2.3 雷山錦鶏繡業公司

雷山錦鶏繡業公司の経営者はミャオ族錦織の州級传承人、甘小芝氏である（図29）。甘小芝氏から聞き取り調査を実施した。传承人には国家、省、州、県のランクがあり、それぞれ年齢制限がある。甘小芝氏は32歳⁴⁰⁾でまだ若い



図 29 雷山錦鷄織業公司

(出所) 2018 年 8 月 29 日撮影。

め州級传承人だが、中央電視台の番組に出演したこともあり有名である⁴¹⁾。1階はブティック、2階は機織り機が並んでいる(図30)。

甘小芝氏は2008年頃から自宅で制作活動しており、2012年にマイクロ企業を設立した⁴²⁾。義父は木工細工ができ、義母は機織りができたことが雷山錦鷄織業公司を設立したきっかけである。職人は7名おり、平均年齢は30歳で最も若い人が27歳である。最年長の60代女性(義母)が技術指導をしている。このほか、70人程度の職人に外注している。給料は毎月2000元の最低保障額と契約数に応じた出来高制によって支払われる。職人には小さな子どもがいる人もおり、朝晩預けてから出勤してくる。職人のほか、専門の会計や出納係がいる⁴³⁾。

作品の販売先は広州、上海、北京が多いが、決まっていない。この2年ほど省政府が宣伝活



図 30 雷山錦鷄織業公司内で機織りをする甘小芝氏

(出所) 2018 年 8 月 29 日撮影。

動をしている。文化庁は北京や上海、国外でも織物の展示会を開催した。海外の顧客は日本、フランスなどである。日本の顧客は西江でこの製品を知った人が注文をくれて2年のつきあいになる。フランスとは、知り合いを通じて取引が始まった。技術訓練についても、ここ2年間、政府(工信局、民宗局)から1万元から2万元の補助金がついている。

外注先との契約は年間5件から6件、契約期間は2か月から3か月が一般的である。取引が終われば、その都度解消する。職人の技術レベルを確保するため、例えば50名募集し、その中から腕の良い者を20名選抜する方法をとっている。職人は村や県で募集している。

5.3 丹寨県における伝統文化産業の展開

5.3.1 丹寨県石橋黔山古法造紙專業合作社

丹寨県の紙漉きの里・南皋郷石橋村⁴⁴⁾において現地調査を実施した。通りの入り口に「紙街」と書かれた門があり、入ると右手すぐに丹寨県石橋黔山古法造紙專業合作社(以下、合作社)の建物がある(図31)。門の横には、工房の修復等に世界銀行の借款を利用したというパネルがある。自宅兼合作社事務所と紙漉き体験の工房の3階建ての建物は現在修理中で、木の足場に覆われている。合作社の向かいには研修所がある。周囲の家々は木造で黒い瓦屋根。周囲の家は1階から水牛が顔を出していることもあった。



図 31 丹寨県石橋黔山古法造紙專業合作社内

(出所) 2018 年 8 月 30 日撮影。

合作社では王興武氏（丹寨県石橋古紙協会会長、石橋黔山古法造纸專業全作社理事長、国家級非物質文化代表性传承人）から聞き取り調査を実施した。

合作社は2007年設立され、会員は60戸、88人である。会員の年齢は31歳から86歳、最も多い年齢層は40代から50代である。同地域では、若いころは省外に出稼ぎに行くが、結婚すると戻ってくることが多い。生産している製品は、文化財の修復用の紙、書道用の紙、工芸品、旅行者向けの紙漉き体験や土産物などである。王興武氏は2006年に国家級傳承人に認定された。王興武氏曰く「わたしは「活路頭」⁴⁵⁾だ」とのことである。王興武氏は53歳⁴⁶⁾で、高校を中退、出稼ぎに出たことは無い。紙漉きは父親から習い、孫で18代目になる。息子が2人おり、大卒で県政府と大手通信会社で仕事をしている。息子たちは自分の跡を継がないだろう、とのことであった。

解放前（1949年以前）は全ての村人が紙漉きをすることができた。現在はできる人は減ったが、まだまだ後継者の候補はたくさんいる。村主催でコンテストをするなどして、腕を競い合っている。紙漉き技術は約3年で習得でき、性別に関係なくできるが、紙漉きは力仕事なので男性が行い、女性は脱水した紙の乾燥などの軽作業をすることが多い。

紙の原材料は「構樹」という木の樹皮で、地元がたくさん生えている。育つのが早く、1本切ると切り口から6本生えてくる。葉は豚の餌に、幹の部分は焚き木に使う。紙を作るのに6人で分業する。1枚作るのにかかる時間は、文化財の修復用紙は45日、工芸品は18日である。樹皮を水につけ石灰を入れて柔らかくし、草木で漂白する時間も含めるとそのくらいかかる。化学薬品は使わないので、大量生産はできない。周辺の他の村では、紙生産にともなう水質汚染のために生産停止となったという。もし化学物質を使えば河は黒く汚れるそうである。

合作社は基本的に契約に基づいて紙を販売している。2017年の年間販売量は酒造会社向けの醸造紙80万枚、売り上げ額は500万元であ

る。会員になるための条件は特になく、希望者は誰でも入れる。20の工房（洞窟）があるが、分散しているので管理が難しい。2013年以来、毎年3月頃に3種類（紙漉き、接客、歌）の研修があり、期間は5日間、200人から600人参加者がいる。石橋村に講師を招聘し、参加者（地元の村民）は受講すると1人あたり1日20元がもらえる。これには県政府の支援がある⁴⁷⁾。この地域の観光シーズンは春節後だが、12月くらいに少し落ち込むものの、気候が良いので観光シーズンは長い。

製品の販売先は国内の博物館のほか、香港、フランス、アイスランドなどもある。日本の和紙の産地に視察に行ったことがあるが、基本的に日本の製造方法は中国と同じであった。日本は設備が良いとのことである。石橋村では製造方法を昔から全く変えておらず、道具も全て手作りである。道具を作る職人はまだ村に残っている。石橋村は水質が良く、温度など条件が良い。販売先が安定しているのが強みである。花をすき込んだ紙は、王興武氏がある日洞窟で紙をすいていたら一輪の花が落ちてきて、思いついたデザインである。既に東南アジアなど世界中で使われている。商標は「貴紙」という。

石橋村には1つの專業合作社と2つの企業があり、いずれも紙を製造している⁴⁸⁾。営業や販売は共同でしている。戦略として紙の規格（大きさ）を統一し、標準化したことで、これにより、不ぞろいを理由に買いたたかれることがなくなった。価格も安定したので、会員はおおむね現在の販売価格に満足している。顧客は安定しており、WeChatなどで連絡してきて買う個人の顧客は少ない。生産量は昔より少し増えた程度である。ミャオ族の習慣としてお互い助け合いながら生活しており、葬式や新築の手伝いで仕事を離れることもあるそうだ。

石橋村には3つの自然村「石橋大寨」、「荒寨」、「大簸箕寨」⁴⁹⁾がある。村民の年間純収入額は数万元で、主な収入源は紙である。1人あたりの農地は3分、森林は20ムーが分配されている。森林では松などの木材用の樹木を植えており、建築資材として使っている。

村には小学校と中学校が1つずつ、高校は37キロメートル離れた県城にある。高校進学率は高く、9割が大学に進学する。進学率に男女差はない。娘が大学に合格しても、皆喜んでお祝いする。今後の事業展開については、中国の消費市場は世界最大であるので、製品の規格化をすすめたいという。

聞き取り調査後に洞窟の紙漉き工房2か所を現地視察した。1つは大岩壁古法造紙基地石橋古法造紙遺跡で古法造紙体験ができる(図32)。もう1つは大きな鍾乳洞の中にあり、ここは湧き水が利用でき、気温も低く安定しているので、非常に良い質の紙である古籍文物修善迎春紙ができる(図33)。1500年保存可能と言われる、文化財や書籍の修復に用いられる古式製法による「迎春紙」を制作できるのはここだけで

ある⁵⁰⁾。外国の博物館などでも需要がある。また発酵過程で酒種を包む紙も需要が多く、「茅台」⁵¹⁾を扱う有名な酒造会社にも納めている。日本の紙は800年しかもたないという。

5.3.2 貴州丹寨寧航蠟染有限公司⁵²⁾

貴州丹寨寧航蠟染有限公司は丹寨県の万達集団(ワンダ・グループ)が経営するミャオ族テーマパークである丹寨万達小鎮からほど近いまちなかにある、ブティックを併設しているお洒落な工房である(図34)⁵³⁾。董事長の寧曼麗氏から聞き取り調査を実施した。

社屋は3階建てで、地下1階はろうけつ染めの作業場、1階は事務所と店舗、奥に絵付けの作業場がある(図35)。2階には研修用の作業場があり、壁には巨大な「百苗図」の作品が



図32 大岩壁古法造紙基地石橋古法増紙遺跡
(出所) 2018年8月30日撮影。



図34 貴州丹寨寧航蠟染有限公司内の作品
(出所) 2018年8月30日撮影。



図33 古籍文物修善迎春紙製作地
(出所) 2018年8月30日撮影。



図35 貴州丹寨寧航蠟染有限公司内の下絵作業場
(出所) 2018年8月30日撮影。

展示されている。この建物の上の階に宿舎があり、職人が寝泊まりしているという。作業場に1人の若い男性(1989年生)が混じって絵を描いていたが、彼は伝承人の息子で北京の中関村の大学で講師をしているとのことである。

寧曼麗氏は安徽省出身の漢族で、9年前に旅行で排倒村へ行き、ミャオ族の人々の温かさやろうけつ染めの作品に感動して会社を始めた。もともと2008年に展覧会でミャオ族のろうけつ染めの展示を見て知っていたという。当初は生活のためだったが、だんだんろうけつ染めに愛着がわき、好きになった。安徽省にいた頃も生地製造工場を経営していたが、経済危機で原材料である綿、麻、絹、毛の価格が高騰し、破産した。夫や子どもはおらず、1人で会社を経営している。

商品の販売先は、主に広東省、広西チワン族自治区である。消費者の伝統文化に対する認知はどんどん高まっている。固定的な契約があるのは、高級服飾ブランドの「江南布衣」のろうけつ染めシリーズ、「生活在走」などである。他にも小口の取引がある。1つ1つが手作りなので、全く同じものは作れないことを顧客には理解してもらったうえで取引している。インターネット通販の「淘宝」などでは商品の写真を載せて販売するが、自分の会社では欠品が出ても全く同じものを補充することができないので向いていない。WeChatのグループに入っている同業者のなかには、ネット通販で大金を稼ぐ人もいるが、ろうけつ染めは大量生産に向いていない。貴州丹寨寧航蠟染有限公司では先に顧客に商品を送り、気に入れば買ってもらう。幸いこれまで一度も返品されたことは無く、信頼関係が出来上がっている。国外の顧客はほとんどがここに滞在したことがある人や、海外に居住する中国人である。彼らは中国の民族文化を持って帰りたいと考える。交通の便が悪いことで、ここには大自然(「青山緑水」)と伝統文化が比較的良く保存されている。民族文化はここにしかない取り換えのきかないものであり、個々の作品は大学生が入学したりするときに進学先にプレゼントとして持って行くこともある

という。

職人は全部で48人おり、すべてミャオ族である。このうち36人は社屋に住んでおり、残りは家族を呼び寄せ、近くに家を買って通勤している⁵⁴⁾。会社の設立当時は、まず職人である女性が単身で県城に来て、後から夫や子どもがついてくるパターンが多かった。現在ではミャオ族の家庭内での女性の地位も向上してきた。職人の年齢構成は、最高齢が70歳、最年少が20歳である。1960年代から1970年代生まれの職人が多い。排倒村、排莫村の出身者が多く、村で仕事をしている人もいる。車を利用すれば1時間くらいで村に帰れるので、1、2カ月に1度は帰省している。

以下は、寧曼麗氏からの聞き取り内容を整理したものである。

職人の給与は、作品の面積、密度を基準にした出来高制である。毎月の給料は1000元から4500元とかなり個人差がある。9年前にははじめたころは、2か月あたり600元、毎日20元をすべての人に出していた。ミャオ族は仕事について、収入よりも楽しいかどうかを第1に考える傾向があるので、毎日飲酒ばかりして働かない人もいるが、収入が低くても全く気にしないようだ。最初はこのミャオ族の特性を理解していなかった。最初は月に20日勤務の体系で管理していたが、定期市に買い物に行ったり、トイレに行ったら帰ってこなかったりなど、半日しか仕事をしない人も多かった。2か月後からやり方を変え、作品の面積に応じた出来高制にした。すると、大きな布に非常に粗い絵を描く人が現れるなど、試行錯誤が続いた。ひそかに勤務態度を観察し、どのように労務管理したらよいか工夫した。村で親が病気になり看病に帰った人が蠟を持ち帰ると、残った蠟をネコババしようとしたので注意したこともあった⁵⁵⁾。そこでそれぞれの模様にとれだけの時間がかかるかを観察し、図柄による価格を基準化してきた。最初の5年間は利益が出ず、6年目から利益を出し、儲かるよう

になってきた。現在、自分の頭の中で買い取り額の評価基準はあるが、スタッフには教えていない。ずいぶん高い「学費」を払って、ミャオ族の行動原理を理解した。

ミャオ族の女性らは働くうえで、お金儲けというより、楽しいということが1番なので、普通の会社の社員のように扱ってはいけない。図柄は彼女らの頭の中にあるので、何を作るかという要望だけを伝えているという。絵柄のデザインは、ミャオ族の職人それぞれの想像力に任せられている。顧客からは用途を指定されているが、何を描くか指定することは難しい。「文化(学歴)」はない人たちが、独自の文化的なものを持っている。科学とは異なる世界であり、常に職人たちを楽しみ気持ちにさせておくことが、良い作品を作るために重要である。

私が初めてこの地域に来た時、まず凱里に行ったが職人がいなかったの、16の県を全て回ることにし、6つ目の丹寨県で足を止めた。当時は車が入らず、村まで歩いていかなければならなかった。村人は全員ろうけつ染めが作れ、私のことを誰も知らないのに好意的に迎えてくれた。1晩泊めてもらい、ここに決めた。非物質文化の県はここにあると確信した。私がどこから来たのかわからないのに1番きれいな場所に寝かせてくれ、水もおいしい料理も与えてくれた。村の家々はいつも鍵がかかっていなかった。しかし、県城の工房に職人を連れて行く時は「社長が外部から来た漢人なのでたまされるのでは」と疑われたり、「ろうけつ染めはミャオ族のもので漢族のものではない」と言われたり、職人の家族に反対されることも多かった。最初に1人、2回目に6人を連れだすことに成功した。会社設立にあたっては政府や銀行などいろいろな機関を頼った。もともとミャオ族の女性たちはろうけつ染めの作品を家族や知人といった限られた人たちの間で消費しており、基本的にろうけつ染めの作品は市場で売るためのものではなかった。

会社の管理職は4名(会計、事務員、販

売員、董事長)である。初期投資は500万円(借金)で、社長がひとりで調達した。故郷の家などの資産を全て売り払って資金にかえた。ここでの住まいも賃貸、会社の建物も政府に借りており、まだ返済をしている。最初の5年は赤字で6年目から採算がとれるようになった。この間1度も実家に帰らなかったの、家族は「頭がおかしくなった」とか、「いい歳していつまでそんな世間知らずなんだ」と批判した。ところがある日、貴陽の空港で安徽省のテレビ局からの電話があり、省外で起業した人を題材にした番組に出演することになり、ようやく家族の理解を得ることができた。

時々ミャオ族の職人を都市へ連れ出す機会があるが、職人たちは村からほとんど出たことのないので、まるで子どものように純粹である。ある70歳の老婆は凱里にすら行ったことがなかったが、展覧会のため広州と深圳に3、4日連れて行ったところ興奮しきりであった。寝台列車に乗ったので寝るように促したところ「もったいなくて眠れない」とずっと車窓に張り付いていた。ミャオ族は全てのものに陰と陽(雌雄)の区別があると考えていて、違う色の列車がすれ違った時「陰と陽が会った。」と興奮し、「きれい。天国に来たみたい。たくさんの星(明かり)がある。」と語った。深圳から貴陽は飛行機で1時間である。飛行機に乗ったことを自慢するため、航空券を欲しがるといふ。これは2016年の話である。

また、2016年に「百鳥図」を27人の職人で描き、テレビ番組の仕事で北京に連れて行った。ぜひ天安門に行きたいというので朝7時にホテル出発の約束をしたところ、ミャオ族の盛装をして部屋で5時から待機していたという。天安門では「毛主席に私たちが来たことを伝えたい。」とミャオ族の歌を大声で合唱した。多くの人が集まり、動画を撮影したり、中には感動して涙を流したりする人もいた。歌の完成度の高さから、おそらく前日もホテルで練習していたと思われる。

北京には高いビル、車、人、美味しいもの、面白いものがたくさんある。しかし、北京の人はとてもつかれている。とても歩くのがはやい。ずっとスマホをみている。表情がない人もいる。北京では生活の経済的な負担が大きい。ミャオ族は歌いたいときに歌い、踊りたいときに踊り、描きたいときに描く。今日はボーナスをあげますよ、と言ってもいらないと答え、今日は罰金ですよ、と言ってもいいですよ、と答える。楽しむことで、今までよりもっと良い絵が描けるかもしれない。彼女らを尊重している。他の人が作品の写真を撮ったとしてもそれを超える絵は描けない。彼女らはいつも新しいものを描いているので、写真を撮っても追いつかない。1人1人が描いた鳥は全部違う。心の中で受け取るものの形をまねすることはできない。また彼女らは何かあるとすぐに家に帰る。

職人は、日中は服の縫製作業などをし、夜はろうけつ染めの絵を描いている。技術レベルは住み込みも外注も同じだが、実は外注の方が出来栄はよい。予備の外注先として26戸を確保しているが、彼女らは自宅で制作しているため作業により集中できる。ただし、1人で制作している家はしばしば注文を忘れてしまったり、孤独で作業がはかどらなかつたりするため、母と娘など2人以上で、おしゃべりしたり、お互いリマインドしながら制作しているような家を必ず契約対象にするようにしている。時間観念があり省外にいかないことを条件に契約する。社屋に住み込む職人の作品の出来栄が劣る理由は、作業場で集まって作業しているとお互いを比べてしまい焦ってしまうためである。こうした労務管理のコツも失敗を通してわかってきたことである。外注のものは、月末締めで給与を支払う。寧曼麗氏が定めた一定の品質基準にしたがって支払う。全てを買い取るわけではない。

地域の発展と作品の出来には矛盾がある。人との交流が増えると、作り手の気持ちが高揚してデザインの種類も豊富になる。しか

し、静かな環境を要するので、丹寨万達小鎮のようなにぎやかな場所では3年もいたらろうけつ染めの絵を描けなくなってしまうだろう。デザインについては個人の感性や審美眼が影響するもので、マニュアル化したり教師が教えたりできることは限られている。やはり家で母親が教えるのが一番良い。業界の基準、国の基準、産業の基準はない。美術の世界も同じである。基準を作ることが難しい。

当社で取得している商標は3種類、「図騰鳥⁵⁶⁾」、「寧航」(会社の名前)、「千年窩妥⁵⁷⁾」である。丹寨県にはろうけつ染めの業界団体はなく、また国が定めるろうけつ染めの商標も存在しない。

1階のブティックで作品をみた。デザインは伝統柄もあれば現代柄もある。選び抜かれた18人の職人の作品は小さいもので400元から、大きいものは5000元程度であった。その他にもスカーフ、バッグ、洋服や陶器、日用品、インテリア用品などの作品が展示されている。

5.3.3 哎哟蜡染專業合作社

哎哟蜡染專業合作社(以下、合作社)は丹寨県県城にある移転住民用集合住宅(「安置房」)の1階にある小さなろうけつ染め工房である。合作社主任の王祖丹氏から聞き取り調査を実施した。王祖丹氏は25歳、3歳の子どもがいる⁵⁸⁾。家が貧しかったので、中学校を中退した。排倒村出身で、排莫村に嫁いだ。夫は上海、河南などで建設業に従事している。村が設立した專業合作社で、主任となり、2017年この場所に引っ越してきた。県政府の扶貧プロジェクトで建てられた集合住宅で、2年間家賃が無料である。

王祖丹氏は10歳の時から母にろうけつ染めを習い始めた。合作社の職人は4名で、家で制作している人もいる。仕事は朝7時から午後4時まで、1日の最低賃金は100元で、出来高制である。1日1枚絵が描ける。販売先は凱里の博物館、企業などである。現時点ではまだ専門の会計担当は不在であった。技術訓練の機会が

あるが、その都度必要に応じて参加しているという。

王祖丹氏の両親はここで働くことを応援してくれた。ここは静かで絵を描くには向いている。郷鎮での生活は村より何かと便利である。丹寨万達小鎮は省外の開発ディベロッパーが作った施設で、時々見に行くことはある。毎月2、3回は帰省する。乗り合いバスがあり、片道40分から1時間、15元程度で帰ることができる。

ろうけつ染めをするかどうかは、個人の性格や嗜好による。王祖丹氏には妹が1人いるが、性格がせっかちで都会的な生活が好きなので、県城に働きに行った。同級生は皆、一応ろうけつ染めの絵を描くことができるが、きちんとできる人は少ない。王祖丹氏は静かに絵を描くのが好きな性格だったのでろうけつ染めをしている。出稼ぎは現金収入が得られるが、ここでの仕事は売れなければ収入がない代わりに自由がきく。伝統柄を守っていくことも、現代的な柄を作り出していくことも、どちらも大切だと思うとのことであった。

5.3.4 丹寨県県城近隣のろうけつ染め工房

丹寨県県城近くにある1人で工房を切り盛りする老婆を訪問した。プロジェクトの副主任とのことである。「安置房」には年間数千円の補助金が付くという。楊波氏によれば、趣味の良い洋服などが展示されていた。裁断や縫製などはおそらく既製品をまねたのだろう。事務所の奥に古いノートパソコンがあったので、おそらく周囲の若い人が操作を手伝ってあげているだろうとのことであった。

5.3.5 基加村花旗貴州手工業発展プロジェクトの拠点兼楊春燕氏宅

丹寨県楊武郷基加村にある基加村花旗貴州手工業発展プロジェクトの拠点兼楊春燕氏の家は1階に床がコンクリート張り、ろうけつ染めの絵付け工房、プロジェクトで整備したというトイレ兼シャワー室があり、中2階に台所、2階は作品の展示場と居間である(図36)。基加村



図36 基加村花旗貴州手工業発展プロジェクトの拠点兼楊春燕氏宅

(出所) 2018年8月31日撮影。

では山猫を捕まえたことがあるため、作品にも山猫の図柄が描かれている⁵⁹⁾。手が込んでいて丁寧で良い作品である。

この地域では、15歳から18歳の未婚男女が7月の馬の日に「馬浪坡」という場所に登っていき、そこで踊ったり歌ったりする。男女が会うチャンスだという。

5.3.6 争光村村民委員会

争光村村民委員会で聞き取り調査を実施した。村民委員会の前に掲示板があり、「争光村脱貧攻堅党建扶貧作戰図(争光村における貧困脱出のためのロードマップ)」、「漏登困人口(出生証明、戸籍、結婚による移入などの諸々の住民登録が抜け落ちていること)」に関する掲示、村の財務支出一覧、脱貧者リストなどが貼り出されている。建物には、「争光村瑠壁哩苗族蠟染合作社」、「国家級非遺項目苗族蠟染技芸県級生産性保護示範基地」のパネルがある。

村民委員会前の広場を挟んで向かいに、木造の手工藍染協会(以下、協会)の建物がある。調査日はHorowitz氏達が建物の使い方について手工藍染協会の会員全員で決めるために、協会の副主任の年配の女性、数人の会員の女性、建物を建てた建築士の男性を集めていた。

聞き取り調査時に村民委員会を訪れていた病院長の話によると、病院長は兼務で貧困脱出隊長を担当しているという。トイレ改造事業の対象となった40戸のうち20戸を担当してお

り、残りの20戸は協会が担当しているという。2014年から対口支援をおこなっている（「一村一特」）。20年前は村から1人しか大学に行けなかったが、現在はどの村も5、6人の大学生がいる。幼稚園から義務教育は無償、大学の学費も補助が出る。医療費も90%以上（数百円）の補助があり、村民の幸福指数は高い。

2014年に基加村と争光村（いずれも元生産大隊）が合併し、争光村という1つの行政村になった。もともとの基加村と争光村をそれぞれ大寨、小寨と呼ぶこともある。10自然村、6村民小組から成る。ミャオ族が人口の80%を占めるが、スイ族、トン族などが入り混じっている。各村、集落が民族ごとに構成されているとは限らない。争光村は人口1348人、304戸である⁶⁰⁾。国の計画生育政策に変更があり、3人産んでも良い。教育が重視されており、県城にある小学校、中学校にはいずれも寄宿舎がある。農地面積は200ムーである。村で留保している共有地（「機動地」）はなく、全て村民に分配している。土地の98%が森林で、村民1人あたりに農地0.3ムーから0.4ムー、森林1.5ムーずつ分配している。農産物は主に水稻。樹種は「紗木⁶¹⁾」で、住宅の建築材として使う。

協会建物の中はまだがらんどで、調査時は2階のスペースの使い方や照明の配線などについて、貴州師範大学の研究チームが協会の会員らと決めているところであった。

5.3.7 手工藍染協会

手工藍染協会の副主任から聞き取りを実施した。2014年に村主導で專業合作社が設立され、20数人が会員となった。專業合作社は最低10名の会員がいないと設立できない。2017年に県政府や婦女協会の主導でプロジェクトの受け皿として協会ができた。会員は30数名であったが、より団結させるため23人に絞った。男性会員は3名のみである。

副主任は54歳で、三都スイ族自治県の出身である⁶²⁾。中学を中退している。19歳と24歳の2人の息子がいる。長男は大卒で、貴陽市の企業で働いている⁶³⁾。長男が5、6歳の頃に浙

江省に出稼ぎに行った。その後、息子が10代前半まで貴州丹寨寧航蠟染有限公司の紹介で丹寨万達小鎮内の楊芳氏の店、成都で7年から8年働き、もう1つ別の工房で働いた後、2016年に村に帰ってきた。2017年には丹寨県衿佩蜡染文化有限公司という会社を起業した。

5.4 基加村花旗貴州手工業發展プロジェクト 参加者への個別の聞き取り調査

5.4.1 楊春燕氏

1978年生まれ。基加村花旗貴州手工業發展プロジェクトの拠点の家の主人の妻。2人の子どもがいる。2003年にこの家（当時は「新寨」と呼んでいた）に排莫村から嫁いできた。ろうけつ染めは12歳から始めた。家が貧しく、使える布も限られていたので、9歳くらいから木の葉を使って描く練習をしていた。12歳の時に初めて描いた作品を見せてもらう。周囲の模様は母の作品を真似、中心部の絵は自分で考えて描いた。制作中に段々技術が上がっていく形跡が残っている思い出の作品である。この他、200年ほど前の母の父方の祖母の作品を見せてもらった。古いものは糊付けしていた。楊春燕氏は4人兄弟で、兄（排莫村在住）、姉（楊春燕氏の夫のいここに嫁いだ）、妹（楊武郷に嫁いだ）がいる。妹は小さい子どもがいるのでろうけつ染め制作は休業中だという。いとこ同士の結婚は多くないという。

過去に5年ほど村を離れて働いていた時期がある。2007年から2008年に深圳市龍華区で丹寨県出身者が経営しているホテルでろうけつ染めの仕事をし、2008年に帰郷して自宅を建て、2009年から2014年に丹寨県の貴州丹寨寧航蠟染有限公司で働いた。2014年にろうけつ染め合作社を設立し、責任者となる。2017年、癌で入院し、2018年に退院したばかりである。身体が痛くなって動けなくなることがある。2018年7月27日に再検査して薬を処方してもらっている。手工藍染協会の仕事は親戚や会員が手伝ってくれる。合作社の事務所は村民委員会の建物にあり遠い。手工藍染協会ではWeChatでグループをつくっている。手工藍染協会を作る

ときは病院にいたため議論に参加しなかった。

専業合作社のリーダーの4名は全員が女性で、会員は17名である。4名が営業を担当しているが、まだ契約数が少ないのでこれからゆっくり増やしていく予定であるという。海外ではフランス、ブラジル（貴州丹寨寧航蠟染有限公司の紹介）などに顧客がいる。アメリカ人やフランス人はここを訪れたことがあり、知人の紹介や楊波氏のウェブサイト⁶⁴⁾などで顧客がここを知ることができる。職人の給料は作品の品質を見て決めている。1人あたり年間の収入は数千元から数万元と、かなり幅がある。合作社はまだ売り上げから手数料を差し引いたりはしていない。図柄は自由に描くこともあるし、発注元から指定があつて複製することもある。

5.4.2 王花氏

王花氏は42歳で、学校教育を受けたことがない⁶⁵⁾。少しずつ勉強して字を覚えている。排倒村から嫁いできた。手工藍染協会で技術指導をする顧問をしている。刺繍、ろうけつ染め、機織りができる。10歳から11歳ころから母に習い始めた。材料を浪費しないために割れた茶碗や手に絵を書いて練習した。12歳の時に年上の従姉に習って刺繍を始めた。機織りははやく織ることができる。1日15センチ、約1週間で完成させることができる。5人の兄と1人の姉がおり（姉は排莫村に在住）、王花氏は末っ子である。兄たちのなかには広東省や浙江省にいたるものもある。

王花氏には3人の子どもがいる。20年前（1998年頃）長女を連れて夫と広東省に出稼ぎに行った。自身も夫も家が貧しく、教育を受けていないので良い仕事はなく、2人とも酒造工場で働いた。重労働だったが、月給は700元から800元くらいであった。やがて広東省にいた間に2人の子どもが生まれた。長女が7歳の時（2003年頃）、学校に行かせるため、夫1人を残して故郷に戻った。夫は2、3年、広東省で働いた後に戻ってきた。2018年現在、長女は22歳（凱里の大学に進学している）、次女は18歳（丹寨県の高校に通っており、ろうけつ染め

ができる）、長男は16歳（高校生）である。北京語は広東省で覚えた。2006年頃は自分が織った布を背負って、5時間かかる村へ売りに行った。早朝5時に家を出て、夜8時まで帰らなかった。

ろうけつ染め、刺繍、服作りなどから得られる粗収入は2万元から3万元ほどで、3人の子どもを育てるには十分であった。手工藍染協会に特に要求はない。ろうけつ染めの単色の布（祭事に使う紺色の光沢のある布、撥水ではない）を作るのは非常に面倒だが、王花氏は面倒を厭わないので作ることができるそうである。この布の価格は1140元、月に数反作ることができる。染めた布は他の村民のほか、他の村からも買いに来るようになった。ろうけつ染めの作業工程の年間スケジュールは、11月から糸繰り、1月から2月に機織り、暖くなる3月から7月は染色、9月から10月は祭事のため衣装を用いる機会が多い季節である。糸繰りは数人で、機織りは1人でおこなう。習得に時間がかかるので、学校に行っていると習得できない。

手工藍染協会に参加したのは、3人の子育てが終わって時間が自由になったから仕事を探していたためである。丹寨県には年に十数回買い物に行く。行く目的は、麻布、靴の購入、作品の発送などである。家の農地ではインディゴ（藍）1ムーと水稻1ムーを生産しているほか、数分⁶⁶⁾の森林がある。以前は牛や豚も飼っていたが、作品の布を作る時間がないので2、3年前からやめている。

6. おわりに

本稿では、2017年ならびに2018年の現地調査を踏まえて貴州省少数民族地域における社会的課題解決に向けた現場での実践過程を明らかにすることをめざした。

今後の課題として、各対象地域において人びとの実践と政策の相互作用についての考察ならびに事例研究から地域課題の解決を促進・阻害する諸要因の抽出・比較・検討が残されている。

現在、中国では農産物の供給は過剰傾向にあり、農村開発プロジェクトの目標はかつてのよ

うな生産性を向上させることなく、伝統的な土着文化の保全へとシフトしている。新しい世界銀行プロジェクトにも90の専業合作社が入っているが、生産量を増加させても売り切ることができない。専業合作社、専業協会、零細企業などの取り組みは、個人が単独でおこなうのではなく関連した主体が組織化しておこなうところに強みがある。任教授によると、様子を見ながら、試行錯誤をしながらじっくり進めていくとのことである。

一連の現地調査から、複数の異なる手工芸をみることができ、それぞれが異なるバリューチェーンを持ち、異なる消費市場に向けて異なる組織形態を持っていることがわかった。そして中国で特徴的なのは、市場のみならず、技術指導や人材育成などの局面において政府が大きな役割を果たしている点である。調査では個人の経歴にも注目したが、例えば、貴州丹寨寧航蠟染有限公司の寧曼麗氏のように、ろうけつ染めのように閉鎖的な環境で生産している手工芸品を遠い市場と結びつけるような、キーパーソンの存在が重要であることが確認された。なぜならば、ろうけつ染めと他の手工芸品の違いは、市場や職人の居住地の閉鎖性、技術習得にかかる時間の長さ、学校等での技術移転の容易さ、芸術性（職人の労務管理の方法）などであるため、閉鎖的で交通の便の悪いろうけつ染め産地と消費者をつなぐ、寧曼麗氏（貴州丹寨寧航蠟染有限公司）などのバウンダリースパナーとして活動するキーパーソンの存在が重要となるためである。このようなキーパーソンは、経済的な価値のみを追求しているのではなく、その文化的価値や制作過程のストーリーを消費者に伝える役割を果たしている。また王闊果氏（排莫村蜡染合作社）の中学3年生の息子が母の作品を紹介するウェブサイト立ち上げることで、これまでつながりのなかった地域の消費者と作品を制作する生産者の架け橋となった事例や、楊波氏（苹果園兒童助養工作坊）のウェブサイトを通じて作品が取引されるきっかけとなったり、制作されている地域の文化や歴史、人々の暮らしに興味を持ち、より深く理解する

ために制作者の村々を訪れたりする国内外の来訪者も確認できた。これまでつながらなかった消費者と生産者の境界（バウンダリー）がインターネットを通じて超えていくといった諸事例は興味深く、多層なステイクホルダーのかかわりによっていかに社会的課題を解決するとともに地域に暮らす人々の地域に根差した経済的自立を促していくのか、について考えるうえでも示唆的である。もう一つのインプリケーションは、世代による価値観の変化である。若い世代は大学への進学を希望している人も多く、家族もそれを応援しているという。このことが伝統工芸の伝承に与える影響は大きく、社会的環境の変化が一方で伝統工芸を再評価し、他方で社会的環境の変化による価値観の変化が伝統工芸の伝承を妨げるといった矛盾が大きくなることが予想される。

今後は、社会・環境政策から地域社会支援まで、多層な政府レベルと地域、企業と地域、NGO・NPOと地域、都市部と農村部といった多様な協働や連携のあり方に着目し、その実践過程で獲得した知識や知見、ノウハウ等を比較検討することで、いかに他地域にそれらをいかし、社会的課題の解決につなげていくか、という点についても考察を加える予定である。

註

- 1) ろうけつ染め（東南アジアなどの地域によってはバティック染めともいう）とは、蠟をしみこませた部分が白く染め残る性質を利用した染色の技術およびそれによる製品である。溶かした蠟で布地に模様を描き、染色後に蠟を取り除く。防染のための蠟がひび割れたところに染料が入ることで独特の染め上がりが生まれる。中国語では「蠟染」。なお、蠟（簡体字では「蜡」）の本来の発音はlaであるが、調査地ではnaと発音されることが多かった。
- 2) 貴州省人民政府ウェブサイト（<http://www.guizhou.gov.cn/>）。
- 3) 中国の行政区画は中央以下、省級、地級、

- 県級、郷鎮級の5つのレベルから構成され、さらにその下に住民自治組織である社区居民委員会（都市地域）と村民委員会（農村地域）が設置されている。
- 4) 調査メンバーは執筆者のうち、藤田、大塚、山田である。
 - 5) 2017年調査のなかで、本文で言及していない調査先は省略した。
 - 6) 中国における世界銀行による貧困農村地区プロジェクトについては、呉（2016）を参照。
 - 7) 仡佬印染專業合作社理事長、石阡県大沙壩郷党委員会副書記、石阡県扶貧外資中心主任、沙壩郷人民政府郷長らから聞き取りを実施した。
 - 8) 中国語で「板藍根」あるいは「馬藍草」と呼ばれ、根は漢方薬の原料である。
 - 9) 貴州九木和集文化伝播有限公司については「九木和集：貴州文創品牌國際化的探路者」『貴陽宣伝』2017年2号、総第128期（http://gyxc.gywb.cn/html/2017-03/07/content_862863.htm）を参照。
 - 10) 2017年調査時。
 - 11) 「畝（ムー）」は15分の1ヘクタール。「分」はムーの10分の1の面積単位である。以下、本稿では「ムー」と記す。
 - 12) 石阡県の少数民族比率は70%であるが、かなり漢族化が進んでいるという。
 - 13) 本稿で使用した写真は藤田が撮影した。
 - 14) 36歳、女性、石阡県の北にある別の県出身で、夫は合作社がある余家村出身。大学卒業後、太平洋保険で働いていた。夫は貴陽市で会社を経営している。農業経験はない。
 - 15) 理事長は48歳（2017年調査時）。1989年に広州へ出稼ぎに行き、建築業に従事。2001年に地元に戻り、その後16年間、村の農業技術指導員をした。そのため、ある程度、茶の技術は理解している。学歴は初中卒業、広東省から戻った後に中専を卒業。今後は安定的な発展、文化の保護を目指していきたいという。
 - 16) アメリカのサステナビリティおよび環境分野における第三者認証・監査のリーディング企業、SCS (Scientific Certification Systems) Global Service による基準。詳細は同社ウェブサイトを参照のこと（<http://www.scsglobalservices.com/>）。
 - 17) 同地域は長寿の里として知られている。
 - 18) 理事長は32歳（2017年調査時）、トゥジア族。幼少時に母が家を出て、父は中学の頃亡くなったので、自力で努力してきた。弟が1人おり、省外で出稼ぎをしている。幼少時に貧しかった経験からか、地元を発展させたいという気持ちを強く持っている。
 - 19) 小区の範囲は、村民小組や集落の範囲とは一致しない。
 - 20) 本来1ムーあたりの地代は640元である。
 - 21) グーラオ族には固有の文字はなく、現在ではかなり漢族化が進んでおり、民族独自の言語を話せない人が増えているという。
 - 22) 貴州思創実業発展有限公司グループには農業以外にメディアなどさまざまな業種の企業がある。
 - 23) 貴陽市出身のデザイナーで、過去に貴陽市内でデザイン会社を経営していた。
 - 24) 県政府所在地。
 - 25) 現在、中学校区内に3つの小学校があるが、そのうちの1つの小学校は距離が遠いという。
 - 26) 2017年調査時。
 - 27) 「斤」は中国の重量単位。1斤は500g。
 - 28) 「楊波図文集—郷村芸術家画冊」, <http://yangbo.gydp.org/peach/ysj/>.
 - 29) 調査メンバーは執筆者のうち、藤田、大塚、山田である。なお、2018年の調査は、丹寨県楊武郷基加村のシティグループ財団のプロジェクトを担当している Sarah Horowitz 氏（中国名：韓莎莎）、貴州九木和集文化伝播有限公司の趙怡氏、劉香氏、閻冬雨氏、杜君娟氏、李嵐氏（貴州文化庁非物質文化遺産保護中心）、楊波氏（苹果

- 園児童助養工作坊), Katherine Uram 氏 (フルブライト留学生) とともに実施した.
- 30) 農村合作社は以前とは異なり, 合作社を介して補助をおこなっている.
 - 31) 雷山県では, 楊波氏, 趙怡氏, 閻冬雨氏, Uram 氏, 李嵐主任とともに調査を実施した.
 - 32) 犬龍, 魚龍などたような龍がデザインされており, これらは脚の形で判断できるという.
 - 33) ミャオ族の刺繍には, 平繡, 挑花, 堆繡, 鎖繡, 貼布繡, 打籽繡, 破線繡, 釘線繡, 縐繡, 辮繡, 纏繡, 馬尾繡, 錫繡, 蚕絲繡の12種類の技法がある (『苗族刺繡』『百度百科』より).
 - 34) 趙怡氏による解説.
 - 35) 2018年調査時.
 - 36) 2018年調査時, 貴州省に「銀飾」の国家级传承人は2人いる.
 - 37) 2018年調査時.
 - 38) 中国語の標準語, 北京語.
 - 39) 2018年調査時, 58歳.
 - 40) 2018年調査時.
 - 41) 夫は鎮政府で働いており, 雷山錦鶏繡業公司から車で20分ほどかけて通勤している. 2人の子どもがいる.
 - 42) 登録上は有限会社である.
 - 43) 1階に社員の顔写真つき紹介パネルがあり, 技術指導をする義母, 出納係の義父も含まれる.
 - 44) 石橋村の概要は百度百科にあり (<https://baike.baidu.com/item/%E7%9F%B3%E6%A1%A5%E6%9D%91/12813404?fr=aladdin>). 原資料は貴州省丹寨県地方志編纂委員会. 『丹寨県志』. 北京市: 方志出版社, 1999年5月第1版: 129-129, 地元政府ウェブサイト.
 - 45) 「活路頭」とはミャオ族の村の伝統的な習俗で, 農業生産における労働力の管理や祭事を取り仕切る地域のリーダーを指す. 世襲制で, 男性のみが後を継ぐことができる (『西江苗寨里的“活路头”』『新浪網』2018年3月29日, http://k.sina.com.cn/article_2286908003_884f7263020009s3x.html).
 - 46) 2018年調査時.
 - 47) 李嵐氏によると, 補助は省から県, 県から合作社に出す. 省には紙漉きの合作社が2つある.
 - 48) いずれも伝承人でなくても設立できるという.
 - 49) 「寨」は村の意味.
 - 50) 「一張紙能保存1500年? 这个答案在丹寨石橋村」『ZAKER伝値値諮訊』2017年9月19日 (<http://app.myzaker.com/news-article.php?pk=59c084701bc8e0895b000032>).
 - 51) 中国の代表的な白酒で貴州省の特産物.
 - 52) 李嵐氏によれば, 安順には工業化したろうけつ染めの会社があるが, 丹寨県ではここが唯一の手工芸品の会社だという.
 - 53) 関連記事: イエローページ, <http://www.11467.com/qiandongnan/co/14995.htm>, 「丹寨蜡染: 登上現代舞台的藍白芸術」『中国民族報』2016年07月29日, http://www.gxmzb.net/content/2016-07/29/content_16401.htm, 「走进丹寨寧航蜡染基地, 探秘苗民千年传统工艺」『贵州旅游在线』2017年9月27日, <http://www.gz-travel.net/rwgz/mswh/qdn/201709/24092.html>.
 - 54) 会社の設立当初は「農業だけでは食べていけない. 学校もあるし, マンションを借りて村から出ていく. 先に奥さんが来て, だんだんと家族を連れて, 今までは男だけが出てくることはあったが, みんなで出てくることはなかった. はじめは女性が1人であるからといって, 行かせたくないという風潮もあった. またろうけつ染めはミャオ族がするべきで, 外地の人がすること, 外地の人は信じられない. だまされている」, と言われたという.
 - 55) ろうけつ染めの材料である蠟はろうけつ染めをするミャオ族の女性にとっては高価なものであるため, 会社から渡した15斤のうち, 12斤を使い, 残りの3斤をこ

まかそうとした。その後、職人たちの制作にかかる材料の消費量をコントロールするようになった。

- 56) ほかにの人に取りられると困るので急いで取得したという。
- 57) 「窩妥 (wotuo)」はミャオ語でろうけつ染めを指す。
- 58) 2018 年調査時。
- 59) 山猫の毛皮は売り、肉は食用とする。
- 60) 2018 年調査時。
- 61) スギ科とみられる。
- 62) 2018 年調査時。
- 63) 長男には別途貴陽の絲娃娃レストランに偶然出会った際に聞き取りを実施した。協会長の長男（ろうけつ染め企業勤務）は河南省鄭州の大学を卒業。同じ村から 5 人ほど大学に進学する人がいる。男女であまり差はないという。大学進学のために少数民族の優遇制度がある（学費、入試の点数いずれもある）。
- 64) 「楊波図文集—郷村芸術家画冊」, <http://yangbo.gydpdx.org/peach/ysj/>.
- 65) 2018 年調査時。
- 66) 脚注 11) を参照。

参考文献

- 大塚健司編 (2015) 『アジアの生態危機と持続可能性—フィールドからのサステナビリティ論—』アジア経済研究所。
- 竹歳一紀、藤田香編 (2011) 『貧困・環境と持続可能な発展—中国貴州省の社会経済学的研究—』勁草書房。
- 任曉冬等編著 (2005) 『自然保護と社区発展—来自草海的經驗』貴州科技出版社。
- 王小梅・王建萍 (2013) 『藍花叙事』貴州教育出版社。
- 王興驥主編 (2019) 『貴州社会発展報告 2019』社会科学文献出版社。
- 吳国宝 (2016) 「世界銀行貸款中国貧困農村地区可持續發展項目的做法和經驗」(李培林、魏后凱主編『中国扶貧發展報告 (2016)』社会科学文献出版社, 324-334 ページ)。

貴州省人民政府ウェブサイト <http://www.guizhou.gov.cn/>

謝辞

本稿の作成にあたり、任曉冬教授（貴州師範大学）ならびに同大学関係者に深く感謝いたします。また現地調査でご同行いただきました楊波氏、趙怡氏、閻冬雨氏、Sarah Horowitz 氏、Katherine Uram 氏、李嵐氏には多大なご助力、ご助言をいただきましたことに深く感謝いたします。最後に、本稿での現地調査、聞き取り調査にご協力いただきました調査対象地域のみなさまに心より感謝いたします。

本研究は JSPS 科研費 17K02055 の助成を受けたものです。